

キリスト教ベーシックシリーズ、基礎講座、ABC、いろは、何とでも呼んで頂いて良いんですけども、礼拝でも知って頂きたいこと。クリスチャンだろうとノンクリスチャンだろうと関係なく、これだけは知って頂きたい、これだけは押さえて頂きたいというシリーズをこれまでも月 1 回主題説教という形でお届けしてきたわけですが、今日は先程も述べたように「天国と地獄」"heaven and hell"。これが今日のテーマであります。

この中にもひょっとしたら、「神なんか私は信じない。よって天国も地獄も信じないと。人は死んだらただ消えるだけだ」と。そういった“信仰”を持っている方もいると思います。そのように信じているわけです。でも何を根拠にそのように信じているのでしょうか。神がないという根拠は何処にあるのでしょうか。また「天国がない、地獄がない、死んだ人はただ消えるだけだ、星になるだけだ。」そのような信仰の根拠は一体何処にあるのでしょうか。無神論者もそれなりに信仰を持っているのであります。そして無神論者もそれなりに自分の信じるものを持っているのであります。ただその信じるものが、信じる対象が、信頼に値するかどうかの問題なのであります。前にもお話したと思いますが、ある小学生が「僕は天国に行けるほど良いことはしていない。でも地獄に落とされるほど悪いこともしていない。だから僕は中国に行くんだ。」という作文が実際にあったそうです。“中国”、天国と地獄の丁度中間の“中国”ということ言ってるんですけども、でもそのような世界は何処にも無いということをもう一度確認をさせて頂きたいと思います。聖書の言葉はこれまで数千年間書き換えられることがなく、古今東西、ありとあらゆる人たちに受け入れられて来たわけですから。そこに書かれていることが真理ということで、信じられて来たのであります。そのことも皆さんにもう一度吟味して頂いて、信頼に足るものかどうか、そして私たちが信じていることと聖書に書かれていることが、もし違っているならば、そこに差があるならば、ギャップがあるならば、是非その真理の言葉に自分の信仰・思想・考え・価値観というものを合わせて頂きたいと思えます。その都度その都度変わってしまうような信仰や価値観であるならば、常に私たちは振り回されて不安定になってしまいます。でも変わらない言葉、変わらない真理に、人生の土台を置くならば、私たちの人生も安定したものとなります。どんなことがあっても、例え死を迎えるようなことがあったとしても、ビクつくこともありませんし、揺るがされることもありません。

まあ、皆さんにもそれぞれの信仰があるということをお話しましたがけれども、ジョン・レノンという人は、皆さんよく知っていると思います。あのビートルズのジョン・レノンです。彼の書いた歌の中で『イマジン』という歌があります。これはよく“反戦の歌”戦争反対の反戦の歌とか“平和の歌”として、また“愛の歌”として広く知られ、広く歌われるものであります。『イマジン"imagine"』というのは、「想像してごらんささい」という言葉です。で、その『イマジン』の歌は、皆さんの耳にはメロディーとしてきくと刻まれていると思うんですけども、その中身というのはどうでしょうか。日本語でその歌を訳してみましたので、聞いて下さい。

想像してごらん。天国なんて無いんだ。試してみれば簡単なこと。

僕達の下に地獄なんて無いし、僕達の上にはただ空があるだけ。

さあ想像してごらん。みんながただ今日のために生きているって。

想像してごらん。国なんて無いんだと。そんなに難しいことじゃない。

殺したり、死んだりする理由もない。そして宗教もない。

想像してごらん。みんなただ平和に生きているって。

僕のことを夢想家だと言うかもしれない。でも僕一人じゃないはず。

いつか君も僕達の仲間になって、きっと世界は一つになって生きるんだ。

想像してごらん。何も所有しないって、あなたには出来るかな。

欲張ったり、飢える必要もない。人類みんな兄弟なんだって。

想像してごらん。みんなが世界を分かち合うんだって。

僕のことを夢想家だと言うかもしれない。でも僕一人じゃないはず。

いつか君も僕達の仲間になって、世界はきっと一つになって生きるんだ。

“Imagine. There is no heaven.”想像してごらんなさい。天国なんて無いんだと。

この『イマジン』という歌。そこには神の無い福音というものが語られております。ジョン・レノンという人は、自称“本能的社会主義者”と自らを呼んで、『イマジン』にその自分の理想郷というものを描いているのであります。国がなければ戦争なんか無いんだと。宗教は戦争ばかり引き起こしている。だから要らないんだと。天国も地獄も無いんだと。個人財産なんて要らない。みんな平等に分かち合おうじゃないか。神を知らない人たちにとっては、実に魅力的なメッセージであります。まあ、ジョン・レノンはその自らの理想とした自らの信仰、自らの宗教、これを説き、そしてこのために殉教していったわけです。

しかし皆さんにも今ここで、「天国なんて無いんだと」「イマジン」、想像して頂きたいと思います。天国が無いと信じるならば、とにかく若さや美貌を保つためにはなんでもする。お金はそのためには惜しまない。美容。化粧品だとか、エステとか、フィットネスとか、ダイエットとか、ありとあらゆる、お金もかけて美容整形もするかもしれません。

天国が無いと信じるならば、もう限られた命しか無いわけですから、その若さだけが頼りであります。生き甲斐でありますね。で、もし天国が無いと信じるならば、長生きしたい。長寿、健康でいつまでもいたい。その健康維持を保つためならば、何でもする。高い健康食品だって買う。年金とか、保険とか、老後も安楽に暮らせるためにありとあらゆる備えをする。場合によっては長生きするために、臓器売買だってする。冷凍保存だってする。この世がすべてなんだから。天国なんか無ければ、この世しか無いんだから。この世をなるべく長く生き、長くエンジョイするためには、そうしなければいけないという考えに至るわけですね。

また天国が無いと信じるならば、当然地獄も無いと信じるわけであります。その場合、地獄が無いならば何をやったって良い。ばちなんか無いんだ。永遠の裁き・刑罰なんてものは無いんだと。地獄が無ければ何をしたって良い。どんな犯罪だって。倫理観が崩壊してしまうのであります。退廃的な自堕落なライフスタイルに走ってしまうのであります。天国・地獄が無ければ、絶対的な基準・倫理観というものは無いわけです。「何故人を殺してはいけないのか。」という答えには行き詰ってしまうのであります。

で、天国が無いと信じるならば、地上の生涯がすべてと考えなければいけません。この世がすべて。この世の成功がすべて。この世の所有物が、持ち物が、財産がすべて。物質的なものに、目に見えるものに縛られながら生きなければなりません。当然そういった物に対する執着心、<sup>しがらみ</sup> 柵、物質主義、快楽主義、拝金主義、そして刹那主義というもの。今さえ良ければそれでいいと。天国も無ければ、地獄も無い。だから今さえ良ければそれでいいんだと。天国が無いと、必ずこのような生き方になってしまいます。

すべてのものは共有で、何一つ専有しない、独り占めしないんだと。そのような社会を夢見ていたジョン・レノンは、40歳で<sup>そうせい</sup>早逝したわけですが、その時には2億7千5百万ドルもの大金を所持しておりました。大富豪だったわけですね。当然皆さんも知っての通り、ジョン・レノンは妻子を捨てて不倫の末、オノ・ヨーコという女性と結婚しました。ジョン・レノン自身もそのような不遇な幼児期を送っているわけ

です。親が離婚して。でも自分も同じことをして、そして家庭を破壊して、そして他人の家庭までも破壊して。まあ、そのような退廃的なライフスタイル。フリーセックスをし、ドラッグに溺れ、そして名声だとか、またお金といったもの。いろんなものに魅了され、いろんなものに縛られて、彼は最期死んでいったのであります。オノ・ヨーコという人も複数回結婚し、重婚もし、夫がいながら別の男と結婚したり、中絶なんかも繰り返し、二人共そのような退廃的なライフスタイルにドブプリはまって、その上で『イマジネーションの世界』を、自分たちの理想郷を描いたのであります。それが『イマジニ』という曲です。ジョン・レノンとオノ・ヨーコの合作と言われてます。

勿論彼らだけが理想郷を描いて、求めているわけではありません。すべての人の中には、心のどこかには、理想郷を求めている。そのような望郷の念。言わばホームシックのような想い。「この世界がすべてではない。もしこの世界がすべてならば、あまりにも虚し過ぎる。何をしたって虚しい。ただ死んでしまって、すべて終わるだけ。それでは納得いかない。我慢ならない。死んですべてが終わってしまうならば、生きてたって仕方がないじゃないか。何をしたって意味がないじゃないか。」無神論者ですら、そう思ってるわけです。「死んだら消えてしまう。」本気でそう信じたら生きていけないわけです。消えてしまうためのものに、どうやって汗を流すことが出来るでしょうか。消えてしまうもののために、どうやって命をかけられるでしょうか。「何をしたって虚しい」と思って、生きていくことすらもう意味が無いわけですから、さっさと命を絶たなければ。何もかもが意味のないことですから、とてもやりきれないわけです。でも、やりきれないから、どこかで願っているわけです。「この世界がすべてじゃない。きっともっと素晴らしい世界があるはずだ」と。それが理想郷というものです。ユートピアとか、桃源郷とか、アルカディアとか、シャングリラとか、パラダイスとか、世界中でいろんな呼び名があります。天国という言い方も勿論あるわけです。そんな想いをまた宗教に願う者もあるわけです。

例えばイスラム教では、天国について彼らの『クルアーン』と呼ばれる（コーランですね）経典の中に、このように書いてます。『そこでは決して悪酔いすることのない酒や果物、肉などを好きなだけ楽しみ、フリーと呼ばれる永遠の処女と性行為を楽しむ事ができる。』イスラム教の天国は、そこに行けばもう贅沢の限りを尽くし、美味しいグルメを食べて、そして飽きることのない複数の、何人もいる、70人以上いる処女たちと（永遠の処女です。いくらセックスをしても処女のまま。）永遠に性の快楽を楽しむところ。それがイスラム教の天国です。ですから女性にとっては全然天国でも何でもないところですが、でもそのことを教えられて彼らは“ジハード”と呼ばれる、“聖戦”と呼ばれる戦いに駆り立てられていくのであります。もしそこで殉教すれば、もし自爆テロでも行えば、100%その天国に行けるわけです。貧しい人たちはそれを信じて、自分の体に爆弾を巻き付けて、小さな子どもでもそうやって自爆テロを行うわけです。そうすればすぐに天国に行って、ごちそうを食べて、そして処女とセックスをしまくるわけです。そんなところに行きたいと思って彼らはきれいな下着を身に着けて殉教するんです。『9・11』の時もそうでした。彼らはきれいな、真新しい下着を身につけて、飛行機に乗り込んだのであります。それは天国へ行って処女たちとセックスをするためです。それが本当の世界なんでしょうか。それが現実の天国なんでしょうか。まあ、クルアーンというもの、コーランというものには沢山の間違いが記されています。歴史的な事実とは反するようなことがいっぱい書かれています。今そのことを皆さんにお伝えする時間はあまりにも少な過ぎるので、敢えてしませんけれども、コーランというものは歴史的には全く価値の無いものです。彼らの信仰においては価値のあるものかもしれませんが、イスラムの人にとっては、ムスリムにとってはコーランは実に都合の良いものかもしれませんが、でも歴史的な事実というものがそこには全くと言っていいほど盛り込まれていません。ただの空想物語と言えるとと思います。それは信じるに値しないものだと考えられます。

実は聖書の中に『伝道者の書』というところがありまして、そこに**3章11節**『神のなさることは、すべ

て時になんて美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。』“神はまた、人の心に永遠を与えられた。”これは永遠への想いを与えられたと解することが出来ます。すべての人の中に、「人は永遠に生きなければならない」という潜在意識。「永遠に生きなければならない」というほとんど強迫観念といったものが植え付けられているわけです。これが無ければ私たちは、「ただ生きているだけでは虚し過ぎる」と生きていることをやめてしまうわけです。死んだほうがマシだと思ってしまう。でもどこかに「この地上がすべてではない。今日に見えている世界がすべてではない。きっとどこかに永遠につづく世界が、もっと素晴らしい世界があるに違いない。」そのような漠然とした憧れというものが人の意識の中に既にインプットされていると聖書は言っているわけです。

で、冒頭にも申し上げた通り、聖書というものは数千年間一度も書き換えられたことも付け加えられたこともない、古今東西、世界に受け入れられている、今でも永遠のベストセラーです。ロングセラーです。そこには考古学やありとあらゆる科学によって証明されている歴史的な史実で満ちております。ただの神話じゃありません。信頼に足る内容、そのようなドキュメンタリーであります。歴史書であるわけです。まあ、そのことも心に留めておいて頂きたいと思いますが、人間はどこかに帰巢本能なるものを持っているわけです。帰巢本能、鳥が自分の巣に戻るように、鮭が自分の生まれた川に戻るように、帰巢本能というものが人間の中にもあるわけです。人間はどこから来たのか。そのルーツへ。そのもとへ、原点に立ち返ろうとする。そのような帰巢本能若しくは自分がかつて生きていた、自分の先祖がかつて暮らしていた、その故郷。望郷の念を持つわけです。聖書によればその故郷こそ、人間のルーツこそ、エデンの園。そこは最初の人アダムとエバが神によって置かれた場所であります。そこはパラダイスのようなところだと言われています。神の園と呼ばれています。『エデン』という名称は、“樂園”という意味です。パラダイスも“樂園”というペルシャ語から来ております。で、そこで最初の人、私たちの先祖であるアダムとエバは、神と同じかたちに似せて造られたと。神は永遠なる存在です。で、人間もそのような永遠なる存在としてもともと造られていたわけでありまして。先程の**伝道者の書 3 : 11**には、そこに神が永遠を与えられたというような、まさに私たちが永遠の神に似るものとして造られているということの意味であります。ですから人が人生に虚しさを感じるのは、心の中にホームシックの想い、望郷の念、帰巢本能があるわけです。「ここが私の本来いるべきところじゃない。本来いるべきところはもっと別にあるはずだ」と。「この世界がすべてであるはずがない。もっと素晴らしいところ。永遠の世界が、理想郷がどこかにあるはずだ」と。C.S.ルイスという人、ナルニア国物語とか皆さん知っていると思いますが、その著者で文学者でもある、また著名なキリスト教弁証者でもある彼がこういう言葉を残していますから、これは一考に値しますからよく聞いて下さい。「生き物に願望があるのは、願望を満足させてくれるものが存在するからだ。赤ん坊は空腹を感じる。それは食べ物というものが存在するからだ。アヒルのひなは泳ごうとする。それは水というものが存在するからだ。人は肉欲を覚える。それはセックスというものが存在するからだ。もし私がこの世界では満たされない願望を抱いているとすれば、それは私が別の世界のために造られたという説明ぐらいしか成り立たないであろう。」この世界では満足できないという願望が皆さんの中にきっとあると思います。ということは何を意味するのか。別の世界が存在するということを示唆しているわけです。暗示しているわけです。赤ちゃんは食べ物を見たことないのに空腹を感じる。アヒルのひなは水をみたことも無いのに泳ごうとする。それは何故か。よく考えてごらん下さいと。それこそイマジジンしてごらん下さいと、C.S.ルイスは言うわけです。

しかし、天国はそのようなイマジネーションの世界ではありません。天国は単なる空想上の夢の国だとか、理想郷ではない。人が勝手にイマジジンする樂園ではありません。むしろ現実の場所、実在の場所、リアルな場所だということを聖書は教えているのであります。エデンの園は、“神の園”と呼ばれ、それは地

上の樂園でありましたが、それは天の本当の樂園、本当の神の園のモデルであると聖書は説いております。他にも旧約聖書の中に出てくるイスラエルが礼拝をささげた幕屋というところ、または神殿というところもすべて天国のモデルを表すものとして描かれております。天国とはこういうところだと。私たちが容易に想像しやすいように、そのようなモデル、雛形、タイプというものを聖書は教えているのであります。エルサレムというところもそうです。後で見ますけれども、天国は新しいエルサレムと呼ばれています。教会も新約聖書の中では“天の御国”天国のようなところだというふうにも描かれております。ですからそれらは天国とはどういうところかを想像させる、言わばミニチュア版のモデルということです。

で、聖書の中には、天国について 557 回も言及があるということ覚えて下さい。ですから天国について知りたければ、是非この聖書を開いて下さい。で、今からその聖書の中から天国についていくつかの箇所を皆さんと共に開いて、見て頂きたいと思います。天国は聖書によれば、実在の世界である。そこは一つの場所というふうに明記されてます。で、まずは新約聖書のヨハネの福音書 14 章を開いて下さい。イエス・キリストの言葉です。『<sup>1</sup>あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。 (で、2 節以降も読み進めていきます。) <sup>2</sup>わたしの父の家には (イエスの父ですから天の父、神の家には)、住まいがたくさんあります。 (これが天国ですね。天国とは父なる神の家。そこは住まいと呼ばれています。) もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。 (天国はただの空想の世界ではなくて、住まいだとか家だとか又場所というふうにイエスが教えています。で、3 節に) わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもてに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。』天国とは一言で言うとイエス・キリストのおられる場所です。で、これはメモだけして頂ければと思いますが、第 2 コリント 5 : 1 によれば、そこは、天国は“永遠の家”と呼ばれています。天の父の家、住まいであり、そこは永遠の家である。私たちの本当のマイホームは天にあるということです。私たちの故郷は天にあるということです。で、また天国は“都”というふうにも呼ばれています。ヘブル 11 : 8~10。『<sup>8</sup>信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らずに、出て行きました。<sup>9</sup>信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。<sup>10</sup> 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。』この“都”とは天国のことです。同じヘブル 13 : 14。『私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。』この地上がパラダイスではない。この地上が天国ではない。もしこの地上が天国だったら、がっかりしますね。失望してしまいます。でも私たちはこの地上に永遠に暮らすために造られているのではない、生かされているのではない。むしろ天にある永遠の都のために、私たちはこうして生まれて、生かされているのであります。そこに私たちは行くことが出来ます。そこで永遠の満ちし、永遠の喜び、永遠の平安を得ることが出来ます。また黙示録 21 章。これもメモだけしておいて下さい。そこには、新しい天と新しい地。今見えているものとは全く別世界の、別次元の、全く質の異なる世界がやって来ると。そこに新しいエルサレムと呼ばれる“天の都”も用意されるということが、聖書の一番最後のところに書かれています。具体的な天国の場所については、その黙示録 21 章から 22 章にかけて読んでみて下さい。新しい天、新しい地、新しいエルサレム。これが私たちが実際に永遠に暮らす天国の姿です。そのすべてをそこに網羅しているわけじゃありませんが、ある程度天国がどういうところかイメージすることができます。で、そこはヘブル人への手紙 1 : 1~3。そこは、天国は“すぐれて高い所”と表現されています。そして第 1 ペテロ 3 : 22。そこは『キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます。』と書いてあります。キリストは天国に上って、そこに神様が勿論おられるわけですが、その神の右の座におられると。さっきも触れた通り、天国はキリストのおられ

るところだと言いました。現実の世界です。実際の場所があるところですから**第2コリント5:8**(私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。)ここでは、クリスチャンが死んで天国に行くということは、主のみもとに行くということだと表現されています。クリスチャンが死ぬということは、この世を去って天国に引っ越すということです。葬式は引っ越しのお祝いということです。もっと素晴らしいところに、すぐれて高い所に引っ越すことができました。天に凱旋帰国できました。その意味においてキリスト教の葬式というのは、祝宴と言っても良いと思います。パーティーのような空間と言って良いと思います。主のみもとに行くということ。そこがまさに天国です。キリストのおられるところ。そこがまさにパラダイスであります。**使徒7:55~56**というところを開いて頂きたいと思います。新約聖書の中でその信仰のゆえに迫害され、石で打たれて殺されて殉教する、処刑されてしまったそのステパノという人の最期の場面が記録されてます。これまでも沢山のクリスチャンたちがその信仰のゆえに弾圧を受け、財産を奪われ、そして家族も殺されたりして、目の前で陵辱されたりして、自分自身もものすごい拷問ではずかしめを受け、その上で殺されて。その数は数え切れないほどです。なぜ彼らはそこまで耐えることが出来たのでしょうか。自分が耐えるだけならばまだしも、妻子までも、家族までも、自分の信仰のゆえに殺されたりするわけです。もしそれが嘘っぱちだったらそこまで出来るでしょうか。でも逆にそれが本当ならば、そこまで出来ないと言えるでしょうか。この世がすべてではない。死んでも無くならない命がある。で、そのことをもう一度このステパノの最期のところに思って頂きたいと思います。『<sup>55</sup>しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、<sup>56</sup>こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」』で、この後ステパノを迫害していた人たちが一斉にステパノを襲って、ステパノは石打の刑で殺されてしまうのであります。でもステパノは見たんです。「天は現実のところだ。そこにイエスがおられる。だから何も怖くない。」死ぬことなど恐れないわけです。クリスチャンは死ぬことなど恐れませんが、迫害も恐れませんが、なぜならば天国の現実を知っているからです。

またパウロという人は、実はこのステパノの処刑の場面に居合わせたんです。かつてはサウロと呼ばれてました。彼はユダヤ教のリーダーで、キリスト教はユダヤ教の異端だと考えて、キリストを信じる者は男だろうと女だろうと子供だろうと容赦せずに捕まえては、リンチをして、そして牢獄にぶち込みました。で、サウロはここでステパノの逮捕にも関与して、そしてステパノの殉教にも関わったわけです。キリスト教撲滅運動の急先鋒<sup>きゅうせんぼう</sup>だったのがサウロという人物です。でもそのサウロが復活のキリストに出会って、それは**使徒の働き9章**に記録されてます。目からうろこの体験をするわけです。目からうろこという言葉、よく使いますが、それは聖書のそのサウロの改心から来ている言葉です。**使徒の働き9章**に(するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。)目からうろこのような物が落ちて、盲目だったサウロの目が、そして彼はパウロとなって、今度は逆にキリスト教の伝道者として最後まで忠実に献身的に殉教するまで働くのであります。最期は皇帝ネロによって首をはねられるわけですが、そのパウロは伝道活動中にステパノと同じように迫害されて、石を投げられて、実は一旦死んでしまうということがあったわけです。“一旦死んでしまう”という言い方をしたのは、その後彼は復活するんです。そのことも聖書に書いてありますけれども、**第2コリント12章**。そこにまるで臨死体験のような、生きたままか、死んでからかよく分からない。それはパウロも分からないけれども、でも私は間違いなく天国を見せて頂いたという告白をしている場面です。抜粋して読みます。**第2コリント12:2**。『私はキリストにあるひとりの人を知っています。(これはパウロが自分のことを語っているんです。)この人は十四年前に(十四年前にパウロは伝道中、迫害を受けて、石を投げられて死んでしまって、その死体がルステラという町の外に投げ捨てられてしまったわけです。その時の体験を書いています。)——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです、——第三の天にま

で引き上げられました。(第三の天というのは、第一の天が地上から見える青い空。第二の天が宇宙。で、第三の天が神のおられるところ、天国というところです。) <sup>3</sup> 私はこの人が (パウロが)、—それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです、—<sup>4</sup> パラダイスに引き上げられて (第三の天、天国のことをパラダイス。楽園という意味です。)、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。』ですからパウロという人も一旦生きたままか、死んだか分かりませんが、その後蘇生したか分かりませんが、でもその時に天国のビジョンを見せて頂いたと。それは第三の天という場所です。それはパラダイスと呼ばれるところ。そこがあまりにも素晴らしいところ、素晴らしすぎたので、彼はもう言葉にならない、形容出来ないほどです。ところがそのパウロという人物は新約聖書の大半を書いた人物です。まさに言葉の人です。でもその彼を持ってしても、天国を正確に描写することが出来ない。あまりにも素晴らしすぎて。でもその体験が、彼をさらに力強く神の道へと突き動かしていくのであります。天国の現実を見てしまったからこそ、誰もパウロを止められないわけです。ものすごい迫害を受けてます。にも関わらずパウロは一向に諦めることも、逃げることも、妥協することもなく、どんどん突き進んで行ったわけですが、その原動力は天国という現実を見てしまったからです。死んでも天国に行くことが分かっているので、死を恐れられないわけです。「殺したければどうぞ。私は天国に行くだけだから。」全然恐れられないわけです。

また他にも天国に関して 557 箇所もあると言いましたけれども、そのすべてを勿論見ることは出来ませんが、**第1ペテロ 1:3~5**には、朽ちることも、消えゆくこともない資産が天に蓄えられている。この世の資産というのは朽ちてしまうもの。消えて無くなってしまうものです。お金の価値も、株の価値も、いくらでも変わってしまうもの。不動産もそうですね。目に見える財産も朽ちてしまう、消えてしまうものです。でも天国には朽ちることも、消えゆくこともない資産が蓄えられている。そこはリアルなところ、現実のところ。楽しみにして頂きたいところです。私たちの永遠の資産が、宝が、そこに蓄えられています。どうやらそこに宝を蓄えることが出来るのか。これはまた別の機会にしたいと思いますが、この地上においてイエス・キリストの栄光をあらわすために、あなたが成したこと。それはすべて神によって評価されます。そして、それは天における報いとしてカウントされます。自分の名誉のためではなくて、神の栄誉のため。自分が喜ぶためではなくて、神様が喜んで下さるために。永遠の価値のあるもののために、今の命を、時間を、持てるものを、それらすべてを投資するならば、必ずそれが天において報われると。そのことがイエス・キリストによっても教えられているわけです。ですから天国に私たちはむしろ期待を持って、早くそこに行きたい。そこには沢山の宝が蓄えられているはずだから。勿論それを期待したければ、今の地上生涯を一秒たりとも無駄にはしてはいけません。というのは、明日があるかどうか、何の保証もないからです。地上にいる間に私たちはいくらでも稼ぐことが出来るんです。天国に宝を蓄えることが出来るんです。でも死んでしまったら、もうそのチャンスは無いわけです。だからクリスチャンは、熱心に、勤勉に、この地上生涯を神にささげようと用いるのであります。今までは完全に空費していたわけです。無駄遣いしていたわけです。何のために生きているのかも分からない。ただ腹を満たすため。ただ自分の欲望を満たすだけ。ただ自分の夢だけ、願っただけ、それを叶えるための時間であり、労力であり、命だったかもしれません。でもそれは虚しいと、さっきも言いました。死んでしまったら、すべて終わるからです。財産は持って行けません。棺桶になんか誰も入れてくれません。焼けてしまうだけです。あなたの残した財産は、あなた以外の者が使うわけです。でもそれすら永続するわけではありません。自分の子供に、孫に財産を残した、土地を残した。でもそれは二束三文になってしまうかもしれませんし、それは子孫の代で他人の手に渡ってしまうのかもしれません。虚しいものです。

で、他にも天国について**黙示録 19:2**には、天国の描写の中に『**神のさばきは真実で、正しいからである。**』と書いてあります。天において私たちが真っ先に気付くこと。それは、神のさばきは若しくは神の判

断は真実で、正しいから。今皆さんはこの地上にいながら、やるせない気持ちになっているかもしれません。納得がいかない。理解出来ない。絶対にこれだけは許せない。我慢ならない。間違っている。どこかおかしい。何故神は何もなさらないのか。何故神は正して下さらないのか。さばきをつけてくださらないのか。正義がねじ曲げられている。悪がまかり通っている。こんなことはあってはいけない、許されない。神がいるならどうして何もしないのか、どうして解決しないのか。納得がいかない。理不尽だと。いろんな思いが、複雑な思いがこの地上に生きている限りつきまとうわけです。でも天国に行ったら、それらすべてからあなたは解放されます。ここに書かれている通り、神のさばきは、神のジャッジは、真実で正しい。そこで分かるんです。神様が何をなさっていたのか。私たちは神が何もなさらない、何もして下さらない。さばきもつけないし、ジャッジもしない。正されないし、さばきもつけない。おかしいじゃないか。でも天国に行ったら、「それはこういうことだったんだと。ようやく分かりました。目が覚めました。ようやくこれで納得がいきました。全然分からなかったけれども、天国に行ったらすべて腑に落ちた、分かりました。」ですから、今分かろうとしないで下さい。どうせ私たちのちっぽけな脳ミソでは、神のなさることはとても把握しきれない。それが現実だと思います。「何故ですか」、という質問。「納得がいかないから、説明して下さい。」勿論神様はいくらでも説明して下さいますけれども、説明したところで私たちには到底理解出来ないところがあるわけです。でも天国に行ったら、すべてが分かる、すべてが理解できる。それが天国というところです。楽しみです。そこに行って、「あっ、この時のこと、あの時のこと。これはこういう意味だったのか。こういう判断だったのか。神は正しかった。素晴らしい。最高だ。」そのことが天国で分かるわけです。だから今すべて分かろうとしなくても、苛立たなくても、フラストレーションを感じなくても大丈夫です。天国に行ったらすべてから解放されます。

もう一つ、**黙示録 21 : 4~5**。『**4**彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』**5**すると、御座に着いておられる方(神)が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。』これらのことばは、信ずべきものであり、真実であります。天国には涙はありません。死もありません。そして悲しみも、叫びも、苦しみもありません。だからこそパラダイス・樂園と呼ばれてるところです。

でも、イエス・キリストを信じないまま死んでしまって、「天国にあの人がいない、この人がいない。」その時私は天国でどう思うだろうか。悲しまないだろうか。心痛まないだろうか。残念がらないだろうか。後悔しないだろうか。そのために号泣しないだろうか。自分だけ天国に行って、あの人たちは地獄にいる。さっきは天国と地獄しかないと言いました。中国は無いと言いました。天国にいないということは、地獄にいるということの意味するわけです。それを思うと天国でも悲しむ、苦しむ、痛む、涙が流れないかどうか疑問ですと、思う人もあると思います。でもここに書いてあります。『**見よ。わたしは、すべてを新しくする。**』この“新しくする”の中には、勿論古いものが新しくされるだけじゃなくて、私たちの存在自体が、記憶も何もかも新しくされるということです。**イザヤ 65 : 17**をお読みします。『**見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。**』“先の事”、過去の事です。それはもう心に上ることもない。天国にあの人がいない、この人がいない。もうそういう記憶は無いわけです。後悔する必要がないわけです。もし後悔しなきゃいけないようなところであるならば、それは天国ではありません。ですから例えイエスを信じないで、天国に行かずに地獄にあの人たちが行ってしまったとしても、そのあの人たちのことをあなたは天国で思い出すことは絶対ないということです。だから安心して下さい。でも今私たちは安心できません。今ならばチャンスがあるからです。今ならば、あの人も天国にまだ行けるチャンスがある。この人も天国行くことのできるチャンスが。死んでしまったらもう終わりです。手遅れです。ですから、その前に何としてでも、という思いがクリスチャンにはありますから、



だからクリスチャンは伝道するんです。それは教会を大きくするためじゃないんです。布教活動というのは、教会員の義務じゃないんです。一人でも多くの人を教会に連れてきて、そして取り囲んで、縛りつけて、一度入ったら二度と抜け出せないように、組織の一員にするために熱心に布教活動をする。家々を周ってピンポンしながら、引き込むように、抱き込むように。私たちは教会を大きくするために、組織拡大・拡充のために布教活動してるんじゃないありません。そうではなくて、本当に心からあの人を思い、この人のことを思い、天国に行きたくて欲しいからです。地獄には行きたくないので。ただそれだけです。クリスチャンがあなたにイエス・キリストの福音を語ってくれるのは、あなたのことをケアしてるからです。あなたを愛しているからです。むしろあなたのことを愛してなければ、どうでもよければ、地獄に行きたくて構わないと思えば、クリスチャンはあなたには一切何も言いません。放っておきます。もしクリスチャンが自分の家族を、家族に対して伝道しないならば、イエス・キリストの福音を伝えないならば、そのクリスチャンは未信者の家族を少しも愛していないということです。別に地獄に行きたくても構わないと思ってるから、伝道しないんです。「でも伝道なんかしたら、キリストのことなんか伝えたら、気を悪くする。家族関係を悪くしてしまう。喧嘩になってしまう。騒ぎになる。だから私はそうそう口に出さないんです。」それは言い訳です。本当に目の前の人を死のうとしてるのに、あなたは止めないでしょうか。大声で叫んで、怒鳴っても、思いっきり力強く体を引っ張るように危険から遠ざけようと、守ろうとして体当たりしても、後で文句は言われなないと思います。でも「うるさいとか、そんな体当たりしてくるな、痛いから掴むな、もう二度とそんなことは言ってくれるな」いくら何を言われようと、もしその人がまさに電車で轢かれそうになっている。ダンプカーに轢かれそうになっているということであれば、あなたは黙っていないと思います。「嫌われたくないから、逆ギレされたくないから」それがあなたの言い訳ならば、あなたはその人のことを少しも愛しておらず、むしろあなたは自分のことしか愛していません。自分が悲しみたくないからです。自分が嫌な思いをしたくないから。自分が傷つけられたくないから。自分が変な人と思われたくないから。それがただ一つの理由です。言い訳しないで下さい。本当にあなたが愛しているならば、あなたは必ずと言っていいほどイエス・キリストのことを伝えずにはいられないと思います。例え迫害されようともです。理解されなくてもです。嫌われて、怒鳴られて、縁を切ると言われたとしても、命がかかってるんです。で、その命は地上の命どころの話ではありません。これは永遠の運命を決めてしまうものです。だからシリアスなんです。だから真剣なんです。

で、天国の話ばかりでなくて、地獄の話もしなければいけません。地獄も天国と同様、現実の世界であります。“天国”という言葉はキリスト教用語です。仏教の葬式でも「あの人は天国に行った」とか平気でそういうことを言う人もありますけれども。でも“天国”はキリスト教用語です。私たちの使っている聖書には“天国”という訳語はありませんが、口語訳聖書というものには、“天国”という訳語が使われております。または新共同訳聖書では“天の国”。今私たちが使っている新改訳聖書では“天の御国”といった表現がありますが、それが天国を指しています。“地獄”という言葉も仏教用語ではありますが、口語訳聖書ならびに新共同訳聖書には“地獄”という言葉が使われております。新改訳聖書では“地獄”が仏教用語なので、敢えてそれを避けて“ゲヘナ”というギリシャ語の音訳をそのまま使ってます。これは細かい理由もあるんですけれども“ゲヘナ”というのが地獄であるということは認識して頂きたいと思えます。

で、その“地獄”若しくは“ゲヘナ”というところが実在の場所である、現実の場所であるということがやはり聖書の中に語られております。そこもいくつか聖書の箇所を皆さんにお伝えします。まずはマルコの福音書9章43～48節。『<sup>43</sup>もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片手でいのちに入るほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。<sup>45</sup>もし、あなたの足があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片足でいの

ちに入るほうが、両足そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。<sup>47</sup> もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出さない。片目で神の国に入るほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。<sup>48</sup> ここでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることはありません。』恐ろしい世界です。そこには尽きることのないうじとか、消えることのない火が苦しめるとあります。“永遠の火”という表現が**マタイ 25 : 41**（それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された**永遠の火**に入れ。）にあります。また同じく**マタイ 25 : 46**（こうして、この人たちは**永遠の刑罰**に入り、正しい人たちは**永遠のいのち**に入ります。』）というところには“永遠の刑罰”という言葉も使われています。刑罰ということは、永遠に責められ続ける場所。それは自分を責めることも含まれています。一生永遠にそこで後悔し続けるんです。一生後悔し続ける、それはまさに生き地獄だと思うと思いますが、それが永遠に続くんです。**黙示録 20 : 10**（そして、彼らを惑わした悪魔は**火と硫黄との池**に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは**永遠に昼も夜も苦しみを受ける**。）には、『火と硫黄との池で永遠に昼も夜も苦しみを受ける』と書いてあります。それが地獄というところ。また同時にそこは“外の暗闇”と呼ばれています。**マタイ 8 : 12**（しかし、御国の子らは**外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです**。）外の暗やみで泣いて歯ざしりする。永遠にです。真っ暗闇です。自分も見えないわけです。人も見えない真っ暗闇。そこで後悔しながら泣いて歯ざしりするところ、それが地獄です。

で、その地獄にはどういう人たちが行くのか、ということも聖書には書いてあります。**黙示録 21 : 8**。『しかし、**おくびょう者**（おくびょう者というのは“恐れる者”ということです。）、**不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者**（不品行というのは性的不道德の罪を犯している者です。ありとあらゆる性的罪です。当然不倫もそうですし、ポルノ中毒も含まれています。また）、**魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者ども**（嘘つき。嘘をついた者たちも。彼ら）の**受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。**』第一の死は肉体の死です。第二の死は永遠の死、永遠の刑罰。それこそが地獄というところであり。ここにリストアップされてる者は地獄に行く。また**黙示録 22 : 15**。『**犬ども**（“犬ども”というのはこれは皆さんの家のペットの犬ではありません。これは象徴的に使われています。文字通りの意味ではなくて、象徴的な意味です。聖書で“犬ども”というのは、汚れた者。異教徒とか神殿男娼。同性愛は罪ですね。また）、**魔術を行う者**（魔術というのは、“ファーマキア”というギリシャ語から来ています。“ファーマシー”ドラッグを使う者です。また）、**不品行の者**（原語はギリシャ語の“ポルネイア”ポルノグラフィーの語源です。）、**人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行う者はみな、外に出される**。（この“外”というのが地獄です。天国の外は全部地獄です。』これらに該当する者は間違いなく地獄に行きます。今日、あなた嘘をつきましたか。地獄行きです。大変なことになりますね。皆さんここにリストアップされているものの中に該当しないという人は、きっといないと思います。となれば全員地獄行きが相当だと。

また**マタイ 5 : 22**。（しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『**能なし**』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます。また、『**ばか者**』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。）そこには、兄弟に向かって腹を立てる者。カーときたら、地獄行きです。むかつ腹が立つ。地獄行きです。

そしてイエス・キリストの救いを福音を拒んだ者。**マタイ 10 : 15**（まことに、あなたがたに告げます。さばきの日には、ソドムとゴモラの地でも、その町よりは**まだ罰が軽いのです**。）他にもありとあらゆる罪が私たちを地獄に追いやるということを聖書は説くわけですがけれども、最大の罪はイエス・キリストを信じない罪です。どんな罪でも赦して頂けます。でもイエス・キリストを信じないという罪だけは赦されま

せん。なぜならば、それだけが天国に行く唯一の手段、手立てであるからです。あなたを救うことのできるただ一つの解毒剤のようなもの、それが福音というものです。「私はそんなもの信じない。」そうすればあなたはその解毒剤を飲まずに、自分は毒されて死ぬだけです。苦しんで死ぬだけです。イエスを信じなければ、ただ苦しんで死ぬだけです。でもそれは肉体の命が尽きて終わる死ではありません。永遠の死、永遠に苦しまなければいけない死であります。少しその苦しみを描写しているのが、**ルカの福音書 16 章 19～31** のリアルな話です。これは実話だと考えます。イエス・キリストが霊的世界を見て、これを告げられました。何故実話かという、たとえ話の場合は「〇〇のようだ」という表現をなさいます。で、架空の人物の場合は、実名を挙げません。でもここには実名が出てきます。『<sup>19</sup>ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。(紫の衣、細布というのは今で言うところのブランド物の高級衣服を着ていたということです。)<sup>20</sup>ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、<sup>21</sup>金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。<sup>22</sup>さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによって(天使たちによって)アブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。<sup>23</sup>その金持ちは、ハデスで苦しみながら(ハデス。これは死者の行く場所でありすけれども、このハデスの次にゲヘナというところがさっき言った火と硫黄の池、地獄です。この“ハデス”というのはその地獄に落ちるまでの間の収監施設。死刑を受ける前の牢屋と考えて下さい。でもそこは地獄とほとんど同じ程の苦しみの場所であるということがこの後書かれています。その金持ちは、ハデスで苦しみながら)目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。<sup>24</sup>彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』<sup>25</sup>アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみをだえているのです。<sup>26</sup>そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることができないのです。』ハデスは、ゲヘナ・地獄の待合室のようなところだと言いましたが、“アブラハムのふところ”というところは天国の待合室のようなところと考えて下さい。これはイエス・キリストが十字架で死んで、罪をすべて贖われてからは、この“アブラハムのふところ”はもう空っぽになって、もう待合室は必要なくなりました。イエスを信じたら直接天国に行ける。ですから待合室は今も空っぽです。でもハデスというところは、今でも人がそこにおります。ゲヘナにはまだ行っていないわけです。イエスを信じない者たちは皆一旦はハデスに収監されます。そこでもう死刑宣告を受けてますから、もうそこからは出られません。地獄に落ちるしかないところです。で、『<sup>27</sup>彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。<sup>28</sup>私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』<sup>29</sup>しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』(“モーセと預言者”というのは、旧約聖書のことです。彼らには聖書があると。彼らは聖書を読んで、聖書を信じるべきだと言ったわけです。ラザロという貧乏人が死からよみがえって、復活して、彼らにこの現実を伝えて、「あなたの家族が今ハデスという地獄のようなところに行って苦しんでる。そこには行って欲しくないから、だから聖書が言うとおりに信じて、キリストを信じて、そして天国に行くようにと。そういうメッセージを伝えて欲しい。ラザロをメッセンジャーとして遣わして欲しいと。この苦しみの中であって、金持ちは家族のことを思ったわけです。家族にはこんな辛い目には遭ってほしくない。でもアブラハムの答えは「彼らは聖書を持っているんだから、聖書を信じるべきだ。」で、)<sup>30</sup>彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』(そんな聖書は読まないと思うし、信じないと思

う。むしろ死人がよみがえってラザロが目の前に現れれば、きっと奇跡を見て彼らは信じるに違いないと。そう金持ちは考えたのです。ところが<sup>31</sup>アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』』と。「奇跡でも見せてくれたら信じる」と。そういう人がたまにいます。でもそういう人は、奇跡を見ても信じません。最初から信じる気が無いんです。信じるつもりが無いんです。信じたいという人は、神の言葉である聖書を信じます。『子よ。思い出してみなさい。』アブラハムはこの金持ちに言いました。「あなたが生きていた頃。地上で贅沢三昧していた頃。自分の命を無駄に使っていた頃を思い出してみなさい。」後悔するわけです。地獄に行った人たちは例外なく後悔します。「あの時クリスチャンの友達があんなに熱心に私にイエスのことを語ってくれた。伝道してくれた。でも私は馬鹿にした。無視した。くだらない。または無関心を装っていつか聞くことにします。今はちょっと忙しいし、時間も無いし、そのうちにお話を聞きますよ。そのうちに信じますよ。この礼拝において、あの牧師が随分大声で叫んでいたようだけれども。天国だの地獄だの訳の分からない空想話をしていたけれども。でも地獄は本当にあったんだと。」そこで地獄に落ちた人は一生永遠にそこで後悔します。そしてイエスを信じていなかった家族のことを思うんです。思い出すんです。「彼らにはこんな苦しい思いはさせたくない。」日本で伝道していると、「クリスチャンになるにはちょっと障害がありますと。イエス・キリストを信じてもいい。でもご先祖様に申し訳がない。仏壇をどうするのか。神棚をどうするのか。お墓はどうするのか。お寺さんとの関係が。だから。」という人がいます。でもハッキリ言いますと、イエスを信じないで地獄にも先祖が行っていたとするならば、その先祖は「どうだっていい」と言うと思います。ご先祖様は「そんなことどうだっていい。あなたはイエスを信じて天国に行ってもらいたい。」それが先祖の願いだと思います。勿論私はすべての先祖が、クリスチャンでなかった人が地獄に行っているとは言いません。イエスを信じていない人たちが行くわけですが、それがキリストのことが伝えられてもいない。キリストのキの字も知らない人たちは死んだら自動的に天国に行かないで地獄に行くとは私は思っておりません。神は公平な方ですから、もし正確に福音を伝えられていないならば、神はちゃんと正確に福音を伝えて、その人が信じることのできるチャンスと、そういう機会を与えて下さると思います。息を引き取ったその後でも、もう意識がないというその無意識の中にも、神は働きかけて、そしてちゃんと公平に裁いて下さると私は信じていますから。でも、生前にハッキリ福音を聴いていて、イエスが自分の罪のために十字架に掛かって、死んで、葬られて、三日目によみがえられた。このことを聴いているのに信じない。その人は地獄に行きます。私の言葉ではありません。それは聖書の言葉です。ヨハネの福音書 3 章 12～13 節。イエスの言葉です。『<sup>12</sup>あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。<sup>13</sup>だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。』イエスは死んで、神に祀り上げられたものではありません。イエスは初めから神です。イエスとなる前から。人となる前から。ですから、神がこの地上に下って来て下さった。そして私たちと同じ人の姿をとられた。私たちの歴史に介入された。それがクリスマスです。ですから、イエスは神の子でもあり、また人の子でもあるわけです。

で、その続きを見て下さい。16 節から 21 節まで。『<sup>16</sup>神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに（イエスをお与えになったほどに）、世を愛された。（“世” というのはあなたのことです。）それは御子を信じる者が（イエスを信じる者が）、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。<sup>17</sup>神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。<sup>18</sup>御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれています。<sup>19</sup>そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに（キリストが世に来ているのに）、人々は光よりもやみを愛した。（キリストを信じない。自分のやりたい放題の罪のライフスタイルを愛して選ん

だわけです。) その行いが悪かったからである。(イエスを信じないのは、自分の悪い行いをやめたくないからです。信じる事が出来ないんじゃないで、信じたくないんです。ただそれだけの事です。) <sup>20</sup> 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。<sup>21</sup> しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。』

で、すこし飛ばしてヨハネ 3 : 31~36。『<sup>31</sup> 上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。(これはイエスの言葉ではなくて、バプテスマのヨハネの言葉で、上から来る方というのはイエス・キリストのことです。) <sup>32</sup> この方は見たこと (この方というのはキリストのことです。)、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。<sup>33</sup> そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。<sup>34</sup> 神がお遣わしになった方は (キリストは)、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。<sup>35</sup> 父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。<sup>36</sup> 御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。』

イエス・キリストを信じない者は、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。天国に行くことはないということです。天国に行かないということは、天国の外、そこはゲヘナ・地獄というところです。これが現実であります。私たちは天国と地獄があれば、当然天国に行きたいと願うものです。天国にあの人がいなければ、私も地獄に行く。軽くそういうことを言う人もあるかもしれませんが。でも地獄は私たちが想像するよりもはるかに苦しいところです。永遠の火。焼かれるような思い。そしてそこはうじで体を食い尽くされずに、ずっとうじ虫に食われ続ける。想像も中々難しいかもしれません。おぞましいというイメージはあると思います。そこは真っ暗闇です。暗いところが怖いという人、あるでしょうか。真っ暗闇です。地獄で仲間たちとパーティーなんてことはいかないわけ。他の人が見えないわけ。そしてそこでは永遠に後悔し続けることになります。「あの時信じておけば良かった。全く自分は愚かだった。馬鹿だった。くだらないプライドで、自分のやりたいことを優先させてしまったから。自分の快楽・欲望、それを追求するばかりに、後回しにしてしまって。こんなことだったらもっと早くに信じておけば良かった。」まあ、そういう後悔をずっとし続けるわけ。神はひとりとして滅びることを望んでいないとさっき読んだばかりです。神があなたを責めるんじゃないんです。あなたがあなたを責めるんです。それが地獄です。そこにはキリストがおられない。天国はキリストがおられるところ。地獄はキリストがおられないところ。だから、キリストがいないからあなたは救われないんです。助けてもらえないんです。語ってもらえない。慰めてもらえない。恐ろしいところです。キリストのおられるところが天国です。キリストさえおられれば、他は何もいらぬという、そういう世界です。それを今から私たちは自分のものとしてすることができます。今イエス・キリストを信じるならば、もうあなたは天国の人になれます。私たちは天に国籍を持つという言葉も聖書に見出すことができます。そこは実在の場所です。国籍がある場所です。国というところです。都というところです。一つの場所というところです。どっかふわふわ浮いているような世界でもありませんし、人の心の中にイメージされるような、イメージーションの想像の産物でもありません。強いて言うならば、仏教で言うところの“極楽浄土”。それは空想の世界です。阿彌陀佛の極楽。阿彌陀佛の阿弥陀さんは架空の人物です。もともと仏教には極楽だとか、浄土とか、そういうものはありませんでした。それはヒンズーのカースト制度とか、バラモン教の影響を受けたもの、若しくはゾロアスター教の影響を受けたもので、開祖と呼ばれる釈尊、お釈迦さん、ゴータマシッダールタ。彼はそのような死んでから地獄に行ったり、畜生の世界に行ったり、飢餓世界に行ったり、天国に行ったり。天上界に行っても死ぬんです。で、死んだらまた地獄に戻るんです。それをグルグル巡り廻る。それを六道と言うんですが、それも仏教の教えじゃないんです。お釈迦さんのあと弟子たちが三百年・四百年かけて、「死んだ師匠は一体何処に行ったのだろうか。きっと仏の国に行っ

たに違いない。仏陀の国に行ったに違いない。仏国土に行ったに違いない。」という教えを勝手に作っちゃったんです。お釈迦さんは「死後の世界のことは分からん」と言ったわけです。「葬式もするな。」と言ったんです。でも後々の人たちがやっぱりそれでは納得がいけない。死んですべて消えて無くなってしまふ。それでは納得がいけないということで、小乗仏教いわゆる原始仏教というものから、中国に渡って、日本に渡って来たら、もう大乘仏教。別の宗教になってしまったわけです。でもそれは人間の心の願いを表す宗教です。死んですべてが終わってしまう。消えて無くなってしまふ。それではやるせない。あまりにも虚しい。全部が空っぽ。お釈迦さんはそう教えたわけです。でもそれではやっていけない。とても生きていけない。だから死後の世界があるはずだと。それが昔からヒンズー教とかバラモン教には輪廻というものであったわけです。死んだら人はいろんなものに生まれ変わる。でもその輪廻のエンドレスのそのサークルの中から抜け出すために、<sup>げだつ</sup>解脱、涅槃といいます。仏教用語では悟りともいいますが、それを得るために仏教を初めたわけです。お釈迦さんは、でも弟子たちはまたものお釈迦さんが否定した輪廻に戻って、また別の宗教を仏教として作ってしまったわけです。その仏教の説く極楽浄土、仏国土、または天上界、全部それは人の心の奥底に潜在意識として残っている天国への憧れ、永遠の世界への憧れ、それが現れたに過ぎません。それが宗教に取り入れられたに過ぎません。お釈迦さんは無神論者だったんです。でも無神論者ではとてもやっていけない。妻子を捨てて、奥さんも子供も捨てて、それではあまりにも人生は虚し過ぎる。それは皆さんにも十分分かります、経験上ですね。でもただの空想じゃなくて、ただのイメージじゃなくて、聖書には真理の言葉として天国と地獄がハッキリと描かれています。で、これをイエス・キリストという方が教えられたんです。イエスはお釈迦さんやムハンマド、孔子、ソクラテスといった聖人や偉人、宗教家と違って、イエスは死からよみがえったんです。他の人たちは、皆んな死んで、葬られて、お墓に葬られたんです。イエスの言葉はただの人間の言葉とはわけが違います。だからこそ聖書は、真理の言葉として、永遠の言葉として、永遠のベストセラーとして、世界の人たちに、時代も超えて、世代も超えて、今でも通用する言葉として、書き換えられることも付け加えられることもなく、仏典のようにいくらでもバインダーのように後から後から経典が付け加えられていく、いろんな宗派がある、そんなものじゃないんです。聖書はただ一冊です。真理の言葉はこれまで何千年間も書き換えられたことがありません。そしてキリストが死からよみがえって、その復活の事実もいまだかつて覆されたことは一度もありません。キリストの復活が歴史的な事実だということ。それがキリスト教信仰です。これを覆すことが出来るならば、キリスト教なんてものはとっくに滅びています。滅びていないのは何故か。そして、このキリスト教信仰を撲滅させようとする迫害の力。これは今も働いています。今でもクリスチャンは迫害され、殺されています。ローマ帝国の時代よりも、徳川幕府の時代よりも、今の時代のほうが沢山のクリスチャンたちがその信仰のゆえに殺されているんです。でもそれでも信仰は消えないんです。止まないんです。生きてるんです。それは何故か。それは真理だからです。真理のためなら、生命は惜しくない。死んでも生きる。イエスは言いました。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。』と。そしてイエスは『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』と、ヨハネの福音書の中にイエスはそう宣言されました。イエスを信じる者は死ぬことがない。イエスを信じる者は、父のもとに、天国にまっすぐに入れて頂ける。頑張らなくても良いんです。修行を積まなくてもいいんです。お布施をしなくてもいいんです。多額の献金だとか、奉仕だとか、宣教活動を積まなくても、イエスを信じるだけであなたの罪は赦され、そしてあなたは永遠の命を頂いて、天国に入れて頂けるんです。だからこそ、それは福音と呼ばれるんです。福音とは良い知らせです。朗報です。いろんなことをしなきゃいけない。頑張らなきゃいけない。苦しまなきゃいけない。犠牲を払わなきゃいけない。それで何とか認めてもらわなきゃいけない。そうでなければ天国

に行けないとするならば、それは良い知らせでも何でもありません。それはもはや福音ではありません。福音は信じるだけで救われる。いくら南無阿彌陀仏と言っても救われません。阿彌陀佛を信じます。阿彌陀佛に帰依しますという言葉ですが、阿彌陀という人物はいないからです。架空の人物だからです。空想の人物だからです。で、現在ではお釈迦さんですら、実在かどうか今疑われているところです。お釈迦さんがいつ生まれて、いつ死んだのか。そこはいくつもの説があって、まちまちなんです。でもイエスがこの世にいつ来られたのか。何年何月何日に死んで、よみがえったのか。そこまで歴史的に証明出来るんです。イエスの言葉は本当です。リアルです。どの宗教を信じるのか、自由ですけれども、吟味しなくては行けません。何を信じるのか、それはあなたの自由、あなたの勝手、だれも強要しません。でも何を信じるのか。自分を信じるのか。他人を信じるのか。宗教を信じるのか。無宗教を信じるのか。無神論を信じるのか。科学を信じるのか。目に見える金を信じるのか。どんな信仰だろうとそれが信じるに値するものならば、それがあなたを地獄から救うものであるならば幸いです。もしそうでないならば、よくよく考えて下さい。あなたは今日死んだら何処に行きますか。天国に間違いなく行けますか。確信を持って断言できる方、どれほどいるのでしょうか。それとも「分かりません。ひょっとしたら地獄かもしれない。」そう思っている方は是非今日この時にイエスを信じれば、間違いなく今日死んでも天国に行けます。滑り込みでも入れますから、心配しないで下さい。テロリストだった強盗。彼はイエスの隣で、自分の罪ゆえに極刑に服していたわけです。イエスは罪がないのに十字架に掛かっていましたが、両隣りにいた強盗・テロリストはその罪のゆえに強盗殺人も行なったと思いますから、当然十字架刑にあって然るべきだったんです。でもその強盗が十字架に磔はりつけにされながらもイエスを見て、イエスを信じたんです。その瞬間イエスは彼にこう言われました。「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と。今イエスを信じれば、パラダイスに行くことができます。今日死んでも大丈夫です。別に善行を積まなくても、教会に足繁く通わなくても、イエスを信じるだけであなたは今日、天国に行けます。例え死んでも怖がる必要はありません。でももし生かされるならば、天に沢山の宝を積むこともできますから、私たちクリスチャンはそのようにして今日も集まってきたわけです。だから聖書を読むんです。だから祈るんです。だから賛美するんです。だからキリストのことを宣べ伝えるんです。天国が楽しみだからです。そして一人ひとり愛しているからです。あの人にもこの人にも天国に行ってもらいたい。地獄になんか行って欲しくない。しつこいかもしれない。押し付けがましいかもしれない。でも永遠に苦しんで欲しくない。ただその一念です。今日はこれで終わりたいと思いますが、是非この言葉を伝えて頂きたいと思います。もうイエスを信じている人たちは、自分だけ天国に行ければそれでいいと自己満足するんじゃなくて、イエスを信じていない家族は、愛する人たちは、友達、親は、親戚はどうなのか。そして、促して欲しいと思います。いつ死んでも良いように。もう死を恐れなくても良いように。本当の命を見つけて、何のために生きているのか、生きる目的を見出してもらうため、是非伝えて頂きたいと思います。紐付きじゃありません。ただで受けられる救いです。見返りも求められません。ただ受け取るだけでいい。神の恵みの救いであります。では今日はこれで終わりたいと思います。